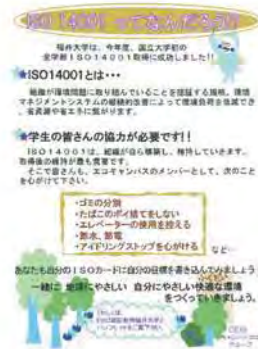




エコキャンパスに向けた学生の環境活動

環境ISO14001を取得して以来、文京キャンパスにおいて、学生の環境に対する活動が活発になっています。特に、キャンパスエコグループを中心として、環境ISO啓発用のポスターや、エレベーターの使用を節減するポスターなどの作製、学内美化活動、近隣小学校の環境活動支援、循環型社会に向けた取り組みなど、多岐にわたり行われています。ここでは、その活動の一端をご紹介します(下はキャンパスエコグループにより作製されたポスターの一部)。

(左) エレベーターの使用を節減するポスター
(右) 環境ISO啓発用のポスター



リユース市

福井大学では、年に一度卒業生の不必要になった家具や電気製品を引き取り、新入生に安く売り渡すリサイクルマーケット(リユース市)を行っています。リユース市をすることで、環境に対する負荷削減や、新入生の家具購入負担の助けになることを目的に行われています。平成16年に開催されたリユース市では、45点の不要品を卒業生から引き取り、41点の物品を新入生に渡すことができました。不要品をゴミとして捨てるのではなく、使えるものはリユースして使うという考えを、一人一人心がけてくれればと思っています。



Bキャン (Beautiful Campus の会) の活動

(教育地域科学部地域環境コース 3年 林信一)
Bキャンは去年の秋、教育地域科学部地域環境講座の本郷教授の提案で発足しました。メンバーは同教授の「住環境計画学」という授業を受けた学生や工学部の学生などで構成されています。この会は、福井大学文京キャンパスを美しく居心地の良い場所に改善するため考え、行動し、そのこと自体を楽しむことを目的としています。今までの活動内容として、週一回昼に集まってお弁当を食べながら話し合い、ベンチ3脚、テーブルつきベンチ2脚製作しました。これらは学内のロビーや玄関、藤棚下に置かれています。多くの人が座ってくれており、会としては嬉しく思っています。今のところ、ベンチ製作を中心に活動していき、またキャンパスの改善点をさらに見つけ、自分たちの手で改善し、学長や関係者への提案者になっていきたいと考えています。



アルミ缶回収

福井大学では、春山小学校の児童が行っているワケルンジャーを受け入れて、アルミ缶回収を行っています。児童が作ったアルミ缶専用のゴミ箱に、福井大学の学生がアルミ缶を捨てるようになっており、そのアルミ缶を週に一度回収するシステムです。ワケルンジャーの児童は、アルミ缶のゴミ箱から間違えて入っているスチール缶などを取り除きながらアルミ缶を回収しており、ゴミの分別もまた回収作業をしながら学んでいるようにも感じられます。また、福井大学の生協に設置してあるデポジットの缶・ペットボトル回収機に児童たちが大変興味を示しており、ワケルンジャーに付き添っている福井大学の学生の私達からみれば、子供のうちから、ゴミ分別の方法や身近な環境問題に触れていくことが重要なのではと感じています。

18 環境関連シンポジウム

福井大学では、ISO14001を代表とする地球環境などへの配慮の取り組みを、多くの人々に理解して頂くと共に、その取り組みを通じた地域貢献を進めています。この活動の一つとして、環境関連シンポジウムを毎年開催しています。

平成16年度は、9月10日(金)福井市フェニックスプラザにおいて、福井県環境エネルギー懇話会様との共催で、「事業所におけるISO14001の認証取得の効果」というタイトルで開催されました。

今年度のシンポジウムは、既にISO14001の認証を取得し、その維持活動に入っている産・学・官の事例を紹介し、認証取得により経費削減等のような効果が得られるのかを、今後認証取得を目指している事業所の方や、認証維持を進めている事業所の方へ提示することを目的としていました。

プログラムは、本学児嶋眞平学長の開会挨拶に始まり、福井大学のISO14001を認証している認証機関、BSIジャパンのEMS技術部長である竹内裕二氏の基調講演、産・学・官よりの事例報告、パネル



シンポジウムで挨拶する児嶋学長

ディスカッション等が催され、盛況の内に終了いたしました。

当日、参加して頂いた人々は、企業関係者、大学関係者を中心に、130名余りとなりました。ご参加頂いた方には、この場をお借りして深謝いたします。

福井大学では、今後もこの取り組みを継続し、より一層地域の要求を反映させた内容での開催を目指していきます。

19 学生による環境活動

松岡キャンパスには、「野ばら会」という学内園芸サークルがあります。本来の活動の趣旨は園芸の愛好ですが、その活動の一端が、学内環境を整える緑化推進の活動となっています。「野ばら会」の具体的な活動の一部として、12月22日に地域のボランティアの方々と、相談機関(福井県総合グリーンセンター)とともに行ったパンジーの植栽作業を紹介します(これは福井大学広報誌「CAMPUS EXPRESS第4号」にも記載されています)。

パンジーの植え込みボランティア(松岡キャンパス)

12月22日(水)、「野ばら会(学内園芸サークル)」による学内花壇のパンジーの植え込みを行いました。これは、本学附属病院に通院されている患者様から「もっと大学に花を植えて欲しい。」と要望があり、

鳴鹿会ボランティア（花壇を管理して頂いているボランティアグループ）が11月にその申し出を受け、パンジーを病院玄関前花壇に植えました。さらに、患者様から「まだまだ、植える場所がたくさんあるし、もっと植えて頂けるなら、協力させて欲しい。花で大学を明るくして欲しい。」というお申し出があり、「野ばら会」が学生にボランティアを募り、行ったものです。



当日は、やや肌寒いながらも天候にも恵まれ、松岡キャンパスの各所にきれいな花を植えることができました。

ご協力頂きました建石農園様、グリーンセンター様、ボランティアの皆様、ありがとうございました。

参加者の感想

野ばら会メンバー看護学科2年生 石坂さん

花を植える作業しか参加できなかったのですが、花を植えるまでに土の中を花の育ちやすい状態にする作業が一番大変だったのではないかと思います。みんなでやると達成感があり、先輩、先生や友達のいい部分が沢山見れたような気がします。



野ばら会メンバー看護学科2年生 松宮さん

今まで荒れ放題の校内も雑草を抜いて花を植えることでNEW福井大学として生まれ変わったと思います。学生・病院を訪れる人を楽しませて癒す、そんな活動に関わることができ、楽しかったです。作業は肉体労働が主ですが、自分達の力で大学をかえていくのは、やりがいがあります。今後さらに多くの人と関わって活動できたらいいなと思います。



野ばら会メンバー看護学科2年生 栗栖さん

12/22は1000株以上のパンジーをみんなで協力して植えました。野ばら会のメンバー以外の方々も力になって下さいました。学内は今とてもかわいいパンジーで明るい雰囲気になっています。寒い中、長時間にわたり作業をすることは大変でしたが、大勢で行なったのですごく楽しくできました。野ばら会はみんなお花が好きだけでなく、たくさんの協力者の方々を含め、全員の仲が良いということが自慢できることのひとつだな…と感じました。



学生の環境活動（環境問題調査隊）

工学部の共通科目の中に学際実験・実習というものがあります。このカリキュラムは一般的に「環境問題調査隊」と呼ばれています。本来、これは環境教育の項目に該当するところですが、学生の自主性に重点が置かれ、学生主体で進められている点から、学生自らの活動と位置づけました。

平成17年度の調査テーマは全10項目で、以下のとおりです。

1	太陽エネルギー　ーソーラーパネルを使って自動車を動かす取り組み
2	大学内の省エネルギー
3	商店街のこれから　～田原町商店街の提案～
4	植物バイオ
5	大学生よ自然へ還れ！！
6	今をゆく　～福井大学発ベンチャー「MicroFlora」起業の歩み～
7	環境調査隊　福井大学とISO14001
8	製図室を改善したい！
9	ケチは田原町を救う！　ー田原町商店街におけるエココイン導入ー
10	雑木林改造計画

その中でも、環境調査隊というグループ（物理工学科3年生）は「福井大学とISO14001」というテーマで、福井大学の環境ISO活動状況と、今後の環境ISO活動計画への提案を企画しています。以下、この報告書の内容を記載します。

私たちは、福井大学でのISO14001（以下ISOと略す）の実施状況と、今後のISOの活動計画への提案を目的に進めてきた。

福井大学でのISOへのPlan（計画）は、「実験環境の整備」、「環境教育」、「大気保全」、「紙使用量の削減」、「エネルギー消費の削減」の5つを基本方針として活動している。また、このPlanを実現するために様々な活動を行っていることがわかった。

さらに、教員に対してアンケート調査を実施し、5つの計画に対しての大学の活動を評価した。「実験環境の整備」、「大気の保全」、「紙使用量の削減」、「エネルギー消費の削減」に対しての活動は十分評価できるものである。しかし、「環境教育」特に環境に対する意識改革は、まだ十分に行われていないように思われる。

今後、「環境教育を通しての意識改革」「今、行っている環境への活動の徹底」、「環境活動の広報の充実化」等が重要であると考える。

調査を行った学生の意見

この学際実験を通して、ISOが大体どのようなものであるか、それぞれの学科での取り組み等も知ることができた。

（林　長宏）

僕は環境調査隊でISOについて調べました。ISOという具体的なものがどのような仕組みで行われているのかがわかりました。自分もこれからは環境についてもっと考えていきたいと思います。

（林　幸治）

学際実験を行い、私は福井大学の環境への取り組みとその重要性を学びました。またそれを通じて様々なことを体験できよかったです。

（大河内　豪蔵）

調べていくうちに教員の意識の高さに驚いた。歩きタバコ、車の使用率などは学生がほとんどであり、学生の意識向上に努めるべきだと感じた。

（光岡　広貴）



19 学生の環境活動

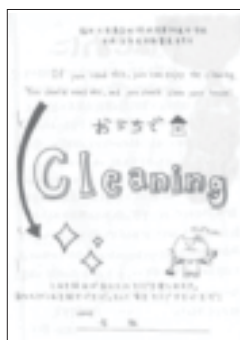
講義や実習などで行われる「環境教育」とは別に、学生などが主体となってすすめている活動について、ここでは「学生の環境活動」として取り上げます。06年度の学生の環境活動として、附属中学校の生徒による整美委員会の活動と、2年生により開催された「附属中学校未来博覧会」の中で取り上げられている温暖化、エコ活動の展示と、工学部学生による学際実験・実習の中で取り組まれた「タバコのポイ捨てに関する取り組み」について、以下に示します。

附属中学校の委員会活動

福井大学教育地域科学部附属中学校では、委員会活動の中で積極的に環境関連活動を推進しています。中でも整美委員会では、前期と後期に分かれている活動の中で、それぞれに活動方針と活動内容を代表である委員長が自らの意志で作成し、環境ISO認証取得校ということを強く意識付けとして進めています。

整美委員会の06年度前期の活動方針は「Fall in Love with Cleaning」で、活動内容も活動方針に沿った①リサイクル用紙回収、②クリームクレンザー作り、③おうちでCleaningでした。

①リサイクル用紙回収では、各教室・職員室・コンピュータ室・印刷室に用紙回収ボックスを設置し、毎週金曜日に回収します。回収した用紙は整美用具室で分別管理し、用紙の両面使用を促進します。両面使用したものは、簡易ゴミ入れなどの作成に利用しました。②の



クリームクレンザー作りは、環境に配慮した素材の、重曹や酢などを利用してクリームクレンザーを作成し、これにより学校内の清掃を行うというものです。③おうちでCleaningは、②の

活動を更に発展し、作成したクリームクレンザーなどを用いて家庭で清掃を行おうというものです。おうちでCleaningにあたり、台所・玄関・浴室・便所などの清掃の仕方をはじめ、洗剤の選び方や洗い方、洋服のたたみ方など詳細に調査・記述したパンフレットを作成しています。この活動は、「環境ISO活動に直接結びつかないが、身の回りの意識改革が環境への意識につながる」と考えられての活動でした。

2006年後期の活動方針は「Clean Up ～すっきりキレイに～」で、活動内容は①リサイクル用紙回収の継続、②清掃用具備品の修理、③ISO啓発ポスターの制作です。



①の活動は、前期の取り組みを発展的に継続させています。②の掃除用具備品の修理では、「直せるものは徹底的に直す」として、技術科で余った合板をほうきの柄などの形状に裁断し、壊れた器具と密着させ、更に塗装を施すといった念の入れようで、一見して修理されたと感じさせないほど見事に再生させています。刷毛の短くなったほうきや、ちりどりの再生にも取り組んでいました。③のISO啓発ポスターは流しや照明のスイッチといった場所に、節電・節水・節紙などのポスターを掲示したり、清掃の全体指導の際に呼びかけを行うといったものです。

中学生の委員会活動ということで、資金面でも時間面でも様々な制約が考えられる中、非常に工夫を凝らし、最大限の取り組みを行っていると思われます。

附属中学校未来博覧会

06年9月23日・24日の両日、2年生により「未来博覧会」と称した展示見学会が行われました。この2年生は、05年(当時1年生)より「万博」をテーマに、遠足を兼ねた愛知万博への見学学習などを行っています。このとき既に、クラスごとに「環境」「世界の国」「技術」

といったテーマを決めて活動しています。1年生の時も文化祭で、愛知万博での各クラスごとの学習発表を行っていますが、2年生になり全体のテーマを「未来」としたものがこの博覧会となっています。

当日は、宇宙開発・ロボット・乗り物・医療といったものの未来に関する考察や展示が行われる中、環境関連の温暖化・エコ技術といったことに対する展示も行われました。全体的な未来に対する展望として、「環境に良い」ということが密接だという認識であることが伺えました。



学際実験・実習におけるタバコのポイ捨てに関する取り組み

工学部の2、3年前期の共通科目の中に、「学生の学生による学生のための科目」として、学際実験・実習というものがあり、その中に「エコロジー&アメニティ・プロジェクト」という環境問題に取り組む部門があります。06年度は、この中でタバコのポイ捨て防止に関する取り組みを行うと共に、タバコのポイ捨て挙動の法則性に関する研究報告を行っています。その活動の一部を以下に示します。

● ポイ捨てデータの収集

ポイ捨てデータの収集は、工学部1号館付近の観察区域では、定期的にタバコのゴミ清掃を行った後にポイ捨てについて観察し、その他の部分では1m半径内に落ちているタバコの本数の数量変化を収集しています。その測定箇所は大学内の7区域と、福井県立大学など学外にも及んでいます。



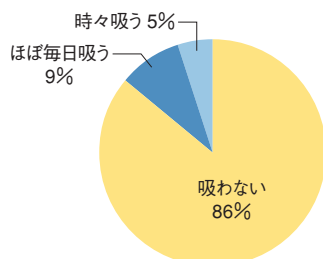
ポイ捨て防止の呼び掛けをする学生

● アンケート調査

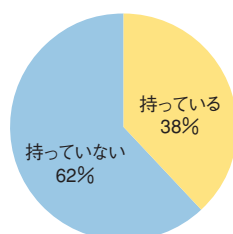
福井大学工学部の学生を対象として、06年6～7月において喫煙・携帯灰皿所持の有無・タバコのポイ捨て経験の有無やポイ捨ての状況などについてアンケート調査を実施しました。ここでは、その一部を掲載します。

(アンケートに対する回答者数：447名)

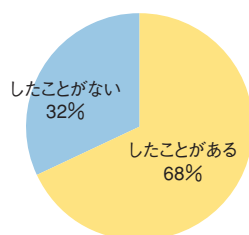
Q1. あなたは大学でタバコを吸いますか？



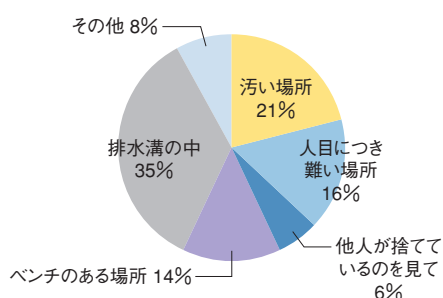
Q2. あなたは携帯灰皿を持っていますか？



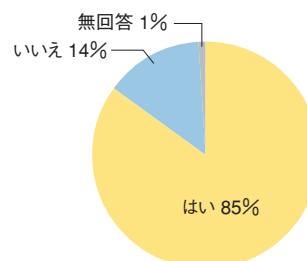
Q3. あなたは、大学内でポイ捨てをしたことがありますか？



Q4. あなたは、大学内のどのような場所でポイ捨てをしますか？



Q5. あなたは、大学内のポイ捨てをなくしたいですか？



● まとめ

喫煙動向等のアンケートの結果、学生の喫煙率は05年に得ている結果（16.9％）と比較すると、3.1ポイント程度下がっています。

タバコのポイ捨てに関しては、タバコを捨てる際に、すでに捨ててあるスポットにポイ捨てる傾向の再確認や、アンケートによる意識調査と観察データによる分析結果により、その規則性が確認されました。これらの結果より、

- ・3本以上落ちている個所のみを掃除するだけで、半数以上のタバコのゴミが回収できる。
- ・比較的ポイ捨てタバコの少ないところは、すべてのタバコゴミを回収すべきである。
- ・特にポイ捨ての目立つ場所のみを掃除しても、十分な割合のタバコゴミを回収できる。

ということが考察されることとなりました。

以上のことに関しては、福井大学大学院工学研究科研究報告第55巻の「タバコのポイ捨てにおけるフラクタル分析の発想－観測事実とモデル解析－」にも記載されています。

21 学生の環境活動

本学の構成員として大多数を占める学生が、環境保全について自ら行動し、すすめている活動について取り上げます。文京キャンパスでは、07年度工学部学際実験実習における雑木林を守るための取組を、松岡キャンパスでは、学内に草花を植える「野ばら会」の活動を紹介します。

学際実験・雑木林を考えよう!(文京キャンパス)

工学部の科目の中に、学生自らが考え、行動し、実験などに基づき研究結果をまとめていくという、学際実験・実習というものがあります。07年度は「雑木林を考えよう!」という実験がありました。文京キャンパス南側に広がる雑木林の有効利用を訴え、利用プランなどを作成しました。その学際実験を行なった、工学部ファイバーアメニティ工学科博士後期課程 馬場麻衣さんと、工学部生物応用化学科3年 稲垣貴之さんに詳しいお話を伺いました。

Q1. この実験の目的は何ですか。

A1. 福井大学の南東に位置する雑木林が河川拡幅工事によりなくなる可能性があるという話を聞きました。私たちは、雑木林とキャンパス整備により取り壊される物理工学科棟跡地を学生や地域住民が快適な生活を送るための空間にしたいと考え、利用計画案を作成することにしました。

Q2. 学生にアンケートをとったようですが、反応はどうでしたか。

A2. 授業の始めにアンケートに協力してもらったり、また先生にお願いして、授業中にアンケートに答える時間を設けてもらったりしました。回収した結果、約340人から回答を得ました。雑木林やキャンパス整備について自由に記入してもらった質問があったのですが、「自由に使える運動場が欲しい」、「もっと緑を増やして欲しい」、「売店やカ

フェが欲しい」、「多くの人が楽しめるようなところを作ると良いと思う」など、いろいろな意見があるな、と思いました。

Q3. 地域住民の方にもアンケートをとったようですが、結果はどうでしたか。

A3. 「将来こんな空間になったらいいな」というイメージ案を3つ、写真や絵を使って作成しました。その中から気に入ったものを1つ選んで投票してもらいました。「緑いっぱい空間」を選ぶ方が多かったです。

Q4. 利用プランを考えるにあたり、他の大学の事例を調べたそうですが、福井大学と比べてどうでしたか。

A4. 先生が持っていた資料などをお借りしていろいろ調べました。アメリカのキャンパスの写真などを見ましたが、やはり規模が違っていたと思います。「キャンパス＝芝生に寝転がる」というイメージですが、他の大学には広い芝生広場があって、くつろげる空間の事例が多かったです。福井大学もそうなっていました。

Q5. 学長に作成した雑木林の利用プランについて報告されたそうですが…

A5. 学長は時々雑木林を散歩されるそうです。とてもいいところだとおっしゃっていました。プランについては、応援したい、とのお言葉を頂きました。でも、プランが抽象的なので、もう少し具体的に考えてみては、とのご意見も頂きました。08年度も引き続き活動しているので、物理工学科跡地の利用も含めて、詳しいプランを作る予定です。

Q6. 雑木林の魅力はどこだと思いますか。

A6. ちょっとぼーっとしてしまうくらい、気持ちがいいところです。また、雑木林で子供が遊んでいる姿を見ると、自然に触れられ

る空間は大事だと思いますし、またその様子を見ているのが好きです。雑木林に入ることがない学生は、虫がいたりして気持ち悪いところ、と言う人がいますが、このような活動をしていると雑木林に対して愛着が湧いてきます。

Q7. 今後、雑木林も含めたキャンパス作りに何を期待しますか。

A7. 今のキャンパスは、ちょっと休憩するような場所がありません。そういう場所がないので、学内でくつろぐ、ということができないでいます。だから、みんなが大学に留まれる、そして大学を好きになるような場所を作ってほしいです。また、大学の周りは塀で囲まれていて、入りづらい感じがするので、もっと開かれたキャンパスになってほしいと思います。



発表用、アンケート用に作成したパネル



雑木林利用プランの1つ



学際実験・実習発表会の様子

「野ばら会」の活動（松岡キャンパス）

野ばら会会長 医学部看護学科 3年

木下 未来

私たち野ばら会は、看護学科・医学科の学生が集まって、季節のお花を育てているサークルです。発足して5年とまだまだ小さいサークルですが、2007年より部活として認可され、少しずつ色々な活動を行えるようになりました。

野ばら会は発足当初から、園芸の専門家にアドバイスをいただいたり、道具の使い方を教わったりなど、様々な方に支えられてきました。その交流を通して幅広い分野の活動に目を向け、日々試行錯誤しながら美しい花壇・畑を目指しています。

日頃の会の活動としては、花壇のデザインを考えたり、苗の発注・植え込みを行っています。人数や活動資源不足は否めませんが、仲間同士

で助け合い、意見を出し合いながら、智恵を絞って一生懸命花壇・畑の植物を育てています。また、ここ数年では、土壌改善が進み、花壇や畑の面積も大幅に広がりました。そこで育てた野菜を使ってメンバーたちが料理をするなどのイベントを企画して楽しんでいます。また毎年春には富山県にチューリップ祭りに行くのが恒例行事となっています。こういったイベントを通して仲間同士の交流がはかられてより深い仲間意識が築け、明るいサークル活動につながっています。

昨年は松岡キャンパス内の花壇にパンジーの植え込みを行い、普段の2～3倍もの38名の方々がご参加くださいました。今後、野ばら会でイベントを主催した折には、皆様のご参加を心よりお待ちしております。また、野ばら会では老若男女を問わず随時、会員になってくださる方を募集していますので、ご興味のある方はぜひご入会下さい！



野ばら会のメンバー

希望者は野ばら会メンバーか

野ばら会ブログまで

http://blogs.yahoo.co.jp/nobara_kai

携帯の方はこちらから

http://blogs.mobile.yahoo.co.jp/p/blog/myblog/content?bid=nobara_kai&id=40694132



野ばら会が作成した花壇



活動の様子

21 学生の環境活動

私たち学生が「緑のカーテン」を作りました

教育地域科学部 地域環境コース 西坂 友佳里

教育地域科学部2号館の一部が撤去され、その跡地に共用講義棟が建設されました。この工事によって、新講義棟の道路側に花壇を作るスペースが出現しました。私たち教育地域科学部地域環境コースの学生は、そのスペースの活用を検討しました。多くの学生の意見によって、花壇兼用の「緑のカーテン」を作り、育てることにしました。

「緑のカーテン」とは、ツル性の植物を窓の外に植えてネットに這わせて生育させるもので、屋内への日射を遮断するだけでなく、葉から蒸散作用による冷却効果が期待されます。夏場には、「緑のカーテン」の有無によって、内側の室内温度に10℃もの差が出るというデータもあります。また、ゴーヤやきゅうり等を植えれば、収穫の喜びも味わう事ができます。

「緑のカーテン」は“誰もが気軽に出来るエコ活動”として去年頃から急速に流行ってきており、全国的に多くの事例が新聞やテレビで紹介されています。例えば、東京都板橋区では町をあげて「緑のカーテン」づくりに取り組んでいるそうです。このように「緑のカーテン」への注目度はどんどん高まっています。

新講義棟完成時には、講義棟前の花壇は何も植えられていない空きスペースであり、大変殺風景な印象を与えていました。また、ゴミが多く捨てられていました。そこで、私たちは有志を募って、この空きスペースに花を植えようと提案し、当初は花壇にするつもりでした。花壇整備については環境整備課と相談しながら進めました。議論の途中で、花壇としての役割を果たし、さらに温暖化防止に役立つものとして「緑のカーテン」を作ることになりました。一連の作業には教員、大学職員、学生、園芸店と多くの方々の協力を得ることができました。

まず、「緑のカーテン+花壇」をどのようなコンセプトをもって作っていくのかを決めるため、工学部建築建設工学科の研究室にお世話になって情報収集や討議をし、約1か月かけてアサガオで「緑のカーテン」を作るのがよいという結論に到達しました。私たちは、手作りの「緑のカーテン」を目指しました。まず、園芸店の意見に従って、土壌の入れ換え作業と支柱の設置を行いました。幸いなことに、園芸店の厚意により、良質の土を無料で頂くことができ、学生が軽トラで運びました。土の入れ替え作業の際、表土を掘り起こすと、中から大量の石ころや瓦礫が出てきました。これらの瓦礫を撤去する必要性がありました。大変労力のかかる作業でしたが、地域環境コースの学生や工学部建築建設工学科の学生を始め多くの方々に力仕事の協力をして頂くことができ、なんとか入れ換え作業が終了しました。



私たちが自力で花壇の土を入れ替えました。

アサガオの苗は地域環境コースの服部先生が30株程準備して下さいました。地域環境コースでそのアサガオ株を植え、「緑のカーテン」に育てあげました。6月に植えつけてからは毎日の水遣りを欠かさず行いました。夏休みは学生や先生が交代で水遣りを行いました。私たちは手入れの方法などの専門的な知識に乏しかったため、手探りの状態での世話をしたわけですが、少しずつ成長するアサガオを毎朝見る度に嬉しくなった事を覚えています。

計画では、大学が夏休みに入る8月までに花

を咲かせたいと思っていましたが、植え付けが遅かったことと、ツルだけが急速に伸び、多くの花が咲き出したのは8月に入ってからのことでした。その点は残念であり、来年への反省点となりました。また、何種類かの種を植えていたため、カーテンにはピンクや紫、水色など何色もの花が咲きました。写真を撮ったり、アサガオを話題に友人や先生と話すことも楽しみの1つでした。

2008年は初の試みという事で、多くの反省点、改善点が浮かび上がりました。それらを参考に2009年度も「緑のカーテン」づくりを作ります（この原稿を執筆時にはすでに作業が始まっています）。今年度はアサガオだけでなく他の植物も植えることになり、よりにぎやかな花壇を目指しています。反省点が多かった支柱に関しては、今回は環境整備課にお願ひし、来年以降も使用できる立派なものを取り付けてもらいました。また、手入れ方法も福井市環境パートナーシップ会議の「緑のカーテン」プロジェクトへ参加するなど、情報収集を進めており、2009年度は2008年度の「緑のカーテン」よりも立派な「緑のカーテン」を育てたいと思っています。

上述したように、この活動には本当に多くの方々の協力を得ることができました。その期待に応えるためにも、2009年度の活動を充実させるだけでなく、来年以降も続けていきたいと考えています。後輩へ受け継いでいってもらうためにも、仕入れの方法等を反省点も含めて明確にして記録に残し、持続的な活動ができるようにしたいと思っています。また、今回の事例を最初として学内の多くの場所で学生の手作りの「緑のカーテン」ができることを期待しています。なお、「緑のカーテン」の環境上の役割については述べる必要はないと思います。残念ながら、2008年度は、その効果、例えば、室内温度の低下度、景観の美しさ、さらには一般学生の評判などの測定は行えませんでした。残念なこともあります。せっかく作った花壇にゴミやタバコ

の吸い殻が捨てられていることがしばしばありました。構内美化も「緑のカーテン」の作成も多くの学生の協力が必要です。



立派にできたアサガオの「緑のカーテン」

キレイに咲いてくれたアサガオ

2008年度の「野ばら会」の活動 (松岡キャンパス)

野ばら会会長 医学部看護学科 4年 木下 未来

野ばら会は、看護学科、医学科双方の学生が参加しているサークルです。2007年に部活動として認可され、活動の幅を少しずつ広げてきました。主な活動として、松岡キャンパスの看護棟横の花壇で、季節の花や野菜を育てています。発足当初から、お花を育てる専門の方にアドバイスをいただいたり、道具の使い方を教わったりなど、様々な方に支えられてきました。その交流を通して、いろいろな分野の活動に目を向け、日々試行錯誤しながら美しい花壇・畑を目指しています。また、

季節によって植える草花や収穫できる野菜が変化し、とても季節感のある部活でもあります。夏の日照りや、晩秋の冷たい風などは、植物をととても傷めます。それらから花を守り、野菜を実らせていくことはとても大変ですが、同時にやりがいや喜びも感じます。



活動内容には、春・夏・秋花壇づくりのデザイン決定(2009年の春花壇は「流れ星」のデザインで作成しました)、苗の選定～完成後の整備、野菜の苗の植え込み・収穫、花壇・畑の草取りと水やりがあります。恒例行事としては、砺波チューリップフェアや大野の建石さんの農園にいちご狩りに行ったり、収穫した野菜で料理を作ったり、焼き芋大会を開催しています。このような活動を通して、仲間との交流を深め、お互いに協力し、信頼し合える関係性を築いています。

会員数や資源の不足は否めませんが、自分たちが何をしたいのか、どうやって実現していくかを、仲間同士で助け合い、意見を出し合いながら、今あるものを使って、自分たちのできる範囲で、一生懸命花壇・畑の植物を育てています。自分たちで花壇を作り上げていくには、時間的、経済面的な制約があるため、計画を十分に練って工夫する必要があります。例えば、お花の苗を買う際に、お店の方とお会いして少しでも安く購入できるように交渉したりしています。こうした活動は、

社会勉強にもなり、「野ばら会」メンバーの自律性を培うことにも繋がったと思います。そして、いろいろな工夫をした分、完成した花壇を見たときや、花壇に対して、患者さんや学内の皆様の方から感想をいただいた時はとても嬉しく感じます。2008年度は構内の花壇にパンジーを植えたり、野ばら会の花壇に咲いていた花の苗を植え替えるなどして、たくさんの方からご好評をいただきました。

これからも野ばら会が活動している姿を見かけましたら、どうぞお気軽に声をかけてください。



いちご狩り



兼六園



21 学生の環境活動

■ 支障樹木の有効利用②

総合図書館の増築・改修工事に伴う支障樹木の有効利用のひとつとして、工学部建築建設工学科の造形演習で、テーブルとベンチを製作しました。同学科の学生23名がデザインから組み立てまでの一連の作業を担い、10年4月に文京及び松岡の両キャンパスに設置しました。

■ テーブル・ベンチ設置の除幕式

伐採された樹木で製作したテーブル・ベンチの除幕式を、同館庭園で挙行了しました。式には、製作にあたった学生のほか教職員が多数参列し、教育・学生担当の寺岡 英男 理事の挨拶に続き、寺岡理事、高梨 桂治 理事、学生代表2名により除幕されました。



■ ベンチ等の制作に関する学生の体験談

● 倉上歩（建築建設工学科3年）

今回ベンチ制作するにあたってまず興味を持ったのが「福井大学の校舎の改築で切られた木材を使って福井大学のベンチ、机を作る」というエコロジカルで自給自足的なテーマでした。福井大学はどんどん改築や取り壊しをしているようですが、その時に出てしまった木材を利用しない手はありません。またこういったことをするのはこれからの学生の行事を増やし、交流も生み出します。そういった意味で、非常に良いテーマだと思いベンチ制作に取り組むことができました。

ベンチの形態については、あれこれと創意工夫したものではなく、自分の座りたいと思う形をそのまま表現しました。もし奇抜なデザイン、機能重視のデザインにしても、結局人が座らずじまいのベンチになってしまっている例が公共施設にはよく見られます。ベンチがただのオブジェになり本来の機能を満たしていないようなものは人が集まる場所になりえません。これからのこういったイベントなどが今後も続くことを仮定したときに、人の交流が生まれないオブジェの大群にならないように作りたいと思いました。そういった意味で、自分が座りたいと思う形をそのまま表現することで、他の人も同じような気持ちになることを期待しました。

制作にあたっては、友達・先生・業者の方々と共に非常に楽しくできました。そして、なにかをつくるということはとても難しいことだと思



いました。実際の作業では、図面の上からでは見えなかった様々な誤差などがところどころ発生し、ダボ穴ひとつとってもうまくいかなかったりしました。座面がガタガタになったり、重くて運べなかったり、弁柄（顔料）が体中についたり、たくさんのハプニングに見舞われながらも、楽しくできたのがなによりも良かったと思います。

今回の企画は環境に配慮した、現在求められている社会的テーマのひとつであり、人と交流して制作することが良いことだと思いました。人との交流が結果的に社会的テーマについて考えることにも繋がります。そういったことでとても有意義にできたので、是非今後もこういう機会があるのならば参加してみたいと思いました。

●片岡達哉（建築建設工学科3年）

「改修工事の際に出た木材を使ってベンチ等をデザインする」という課題を聞いたときは、自分で設計したものが形として残るめったにない機会だと思いました。丸太を使うということで、複雑な形のものを作るのは難しいと思い、シンプルで使いやすいものにしようと考えました。実際に人が使っているところをイメージし、ベンチに飲み物や本を置くスペースがあると便利なので、ひじ掛けの横幅を広くし高さも通常のものより高いベンチを提案しました。組立作業では、想像以上に重たい丸太と格闘し、何とか完成させることができました。出来上がったものを目の前にして、紙の上にはなかったアイデアに実

際に触れることができたことはうれしかったです。今回は、長年キャンパスの景色の一部となっていた木々を、多くの人が利用できるものとして、自分たちの手で再びキャンパス内に残すことができとても良い経験となりました。

●杉本絢香（建築建設工学科3年）

造形演習第一の授業で、大学附属図書館の改修工事に伴って伐採された木材を活用し、ベンチ・テーブルをデザインする課題が与えられました。

その際、二つの案を提案し、そのうちの一つである肘置き付きの付いた正方形のベンチを、実際に制作するベンチとして選定していただきました。イメージ図などを非常に楽しく描いた思い入れのある課題だったので、選ばれたことが非常に嬉しかったです。

その後、加工業者の方に、木材を組み合わせるためのダボなどを付けていただいたり、組み立てを協力していただいたりしたことで、実際に使用できる形に仕上げることができました。協力者の方なしでは完成し得なかったのも、とても感謝しています。

自分のデザインしたものが立体として完成し、それを不特定多数の人に使用してもらえる機会は、大学の講義や設計の課題では得難く、今回、このような機会に巡り合えて、幸運だったと思っています。



21 学生の環境活動

小河川の空き缶回収ロボットに関する取り組み

知能システム工学専攻
講師 小越 康宏

■はじめに

工学部共通科目に、「学際実験・実習Ⅰ,Ⅱ」という科目があります。この科目は3部門に分かれており、そのひとつに「エコロジー&アメニティ・プロジェクト」(通称:「エコ&アメ」)があります。「エコ&アメ」では学生達が自由にテーマを設定し調査研究などの活動を行います。2007年頃、「小河川の環境問題調査隊」というチームが発足し、「エコ&アメ」の活動の一環として、大学の近くを流れる小河川の環境問題調査や清掃活動に取り組んできました。ちょうど2008年度にサイエンス・パートナーシップ・プロジェクトが採択となり、近隣の小学校や公民館と連携を図りながら、本格的に小河川に関する環境問題や理科教育に取り組むことになりました。今回の報告書では、最近完成した空き缶回収ロボットについてご紹介いたします。

● 小河川の清掃活動の取り組み

「小河川の環境問題調査隊」メンバーは、地域の方々(シルバーボランティア、青年団、小・中学生、および保護者の皆さん)と一緒に連携を図りながら、数回にわたって川の清掃活動を行ってきました。写真1は明新小学校の児童達と一緒に馬渡川の清掃を行った時の様子です。児童の皆さんも環境に関する問題意識は高く、川の中のごみの多さには驚いていました。



写真1 活動の一コマ (2008年7月13日)

次に、写真2は「小河川の環境問題調査隊」のメンバーと、清掃後にまとめられたごみの山です。毎年、この場所で清掃をしているにもかかわらず、清掃した数十メートルの区間からは、13袋(福井市指定ごみ袋大)のごみが出ました。



写真2 活動の一コマ (2009年7月5日)

ごみの内訳は護岸周辺に生えている雑草などが半分近くを占めますが、それ以外は心無い人によって投棄されたごみがほとんどです。大きな物は自転車や自動車のタイヤなどもありました。意外にも空き缶(スチール缶)が川底に多く沈んでおり3袋にもなりました。大学の近くの別の用水路を眺めても、投棄されたスチール缶の多さには驚かされます。ごみのポイ捨ての行為がなくなるのが一番望ましいのですが…。

● 空き缶回収ロボットの開発と回収実験

2009年度より、川底に沈む空き缶の自動回収を目指して、「小河川の環境問題調査隊」および「ヒューマンインタフェース研究室(知能システム)」で製作チームが結成され、空き缶回収ロボットの開発が始まりました。2010年2月には、見事に水中の空き缶回収に成功しました。

ロボットは写真3のように自動車のような形をしており川底を自動走行します。車体前面にあるカメラにより空き缶を認識して近づき、先端に電磁石をもつアームを伸ばしてスチール缶をキャッチし、車体天井部のかごに回収します。工学部のものづくりの精神を生かし、実用化に向けてチャレンジは続いています!



写真3 空き缶回収ロボットの水中動作実演

雑木林を楽しむ会 一人の想いが100年続く場所—



福井大学文京キャンパスの南東に位置する小さな林。それが学生たちで結成された雑木林を楽しむ会(以下「雑楽会」)の活動場所です。雑木林の中には樹齢100年を超えるケヤキ、マツ、モミジなどの樹木が茂り、福井市内でも限られた貴重な緑地となっています。四季に応じて様々な姿を見せてくれるこの雑木林で、学生たちは地域の住民を巻き込んで様々なイベントを企画・実行しながら、持続可能な雑木林を活かす方法を真剣に探っています。

2003年、隣接する底喰川の改修工事に伴い雑木林が親水公園や駐車場に整備されるという計画が持ち上がり、それを知った学生たちにより地域の庭として活用するために雑楽会が結成されました。雑木林の重要性和可能性を地域の住民とともに考え、楽しむ方法を提案し、みごとに雑木林は守られました。

その後主要メンバーの卒業を機に一旦は活動休止状態となったものの、2010年に興味を持った学生たちが集まり再結成されました。活動の目的を「から考え直し」「楽しむ」「維持する」「知ってもらう」をコンセプトに、どうすれば雑木林をずっと残していくことができるか、100年先まで維持するにはどのような工夫が必要かを現役生、地域住民を中心に、卒業生も含めて、みんなで考えてきました。

2011年、再び底喰川の改修工事計画が持ち上がり、河川に面した木々が伐採されて雑木林の面積は当初の6割程度に縮小されてしまいました。持ち味だった鬱蒼とした雰囲気は薄れ、シンボルのツリーハウスも解体せざるを得なくなりました。しかし、雑楽会のメンバーの雑木林への想いは変わりません。「楽しむ」「つなぐ」「変わる」を三本柱に、情報の発信やイベント、ワークショップの企画・運営、想いを共有するための毎週のミーティングなど意欲的に活動を行いました。さらに活動の幅を広げて他団体との交流を積極的に行い、新しい知識、刺激を受けるとともに活動に賛同してくれる人を集め、連携し、ネットワークを構築することで、雑木林の維持に繋がるヒントを得ています。また、隣接する地域住民と共に活動することで地域の活性化にも貢献しています。さらに2011年12月に参加した「全国大学生環境活動コンテスト」では、楽しみながら環境を守る輪を広げていった点が評価され、みごと上位入賞を果たしました。

雑楽会が大切にしているのは、雑木林で過ごす思い出の共有です。持ち寄りバーベキューや映画鑑賞、草刈り、雪遊び、ワークショップなどのイベントを通して、日常的に雑木林と触れ合い、仲間が生まれ、どんどん愛着が湧いていく。どうすれ

ばこの場所、この環境をずっと残していけるか、
一人一人が自然と考えるようになるのです。そして、
そんな環境への思いが少しずつでも日本中

に、世界中に広がって行けばいいと思っています。
この貴重な空間を維持するために、これからも
雑楽会の活動は続いています。

●主な活動内容

- 4月** お花見
ツリーハウス解体&BBQ
- 5月** 原っぱ見学
もりみちプロジェクト(田植え)
学長訪問
- 6月** 大学祭
田原町デザイン会議総会
もりみちプロジェクト(草刈り)
学際実験実習(中間発表)
未来ビレッジネットワークワークショップ
- 7月** BBQ&草刈り
雑木林で Cinema「借りぐらしのアリエッティ」
学際実験実習(最終発表)
- 8月** 学生のちからプレゼンテーション
BBQ&草刈り
田原町夏まつり(もちつき&川下り)
- 9月** もりみちプロジェクト(草刈り・ホテル)
もりみちプロジェクト(稲刈り)
カーフリーデー
- 10月** みんなぐ! 1回目「雑木林を探検しよう!」
みんなぐ! 2回目「拠点づくり」
- 11月** きてみてフェア(かえっこバザール)
みんなぐ! 3回目「雑木林博覧会」
- 12月** まちづくり交歓会参加 招待プレゼン
ふくい若者チャレンジ発足記念大会参加
もりみちプロジェクト(収穫祭)
県土木による工事説明
あわらーと展示
伐採樹木移植計画~専門家に学ぶ~
- 1月** Xmas キャンドルイルミネーション 2011
ecocon 合宿
- 2月** 九頭竜川流域用水シンポジウム
雪遊び
読売新聞の取材
- 3月** 合宿~来年度に向けての雑楽会の方向性~



もりみちPJ(田植え)



林でシネマ



みんなぐ第1回



エココンテスト 2011



まちづくり交歓会

メンバー
からの
メッセージ

自分も雑木林も
成長できる場所!
国枝

雑木林は
第2のふるさと
川端

忘れものを
探せる場所
竹輪

雑木林を
地域の庭に!!
豊田

現実(まわり)とは
少し違う異空間!
服部

雑木林をもっと
もーっと楽しもう!
荒井

なつかしい気持ちに
なれる場所です!
長谷川

本学の学生は、授業やサークル活動などを通して環境保全活動を行っています。今回は医学部環境保健学の実習と工学部の学生による「学際実験・実習」とについて掲載します。

医学部環境保健学の実習では、さまざまな実習内容について紹介します。

また工学部での「学際実験・実習」ですが、工学部共通科目であり、学生の自主性や創造性、知識・技能を統合して問題解決する実践的能力の育成を目的とした科目です。「学生の学生による学生のための授業」を目指しており、3つのプロジェクトにわかれ学生が主体となり様々なテーマに取り組んでいます。今回は地球環境問題や住環境の快適性といった課題に取り組んでいる「エコロジー&アメニティ・プロジェクト」の中の「パソコンリユース」と「底喰川清掃活動」を取り上げます。

環境保全の体験実習

医学部では、医学科4年生による環境保健学の実習において、環境保全の体験ということで、リサイクルセンターへの施設見学あるいは環境美化運動の一環としてゴミ拾いを体験しました。

この実習では、MOEQ(M:医療安全、O:労働安全衛生ないし学校保健、E:環境保全、Q:医療サービス維持向上)入門編ということで、その中の環境保全に関して実習を行いました。



図1. 大学構内のエネルギーセンター見学



図2. リサイクルセンターの見学



図3. 大学の環境保全(環境ISO)の講義



図4. 大学構内のゴミ拾い

パソコンのリユース

福井大学文京キャンパスでは、毎年100台以上のパソコン、モニターが廃棄されます。この廃棄されるものの中にはそのままでも十分使えるものや、壊れているパーツを交換すると使えるようになるものが多数あります。そこで廃棄されたパソコンが使えるものになるように改修したり、それを欲しい人に移譲したりしました。



一斉廃棄の様子。見えそうなパソコンを探しています。

工学部 電気電子工学科 3年 畑中 翔吾

まず初めに、廃棄されるパソコンの中から使えそうなものをできるだけ多く集めました。文京キャンパスでの一斉廃棄での回収や学内リサイクルのシステムの利用により最終的に数十台のパソコンを回収しました。

故障しているパーツの付け替えや修理を行い、10数台のパソコンが使えるようになりました。ですが、パソコンの型が古く、性能が低すぎて使用するには無理があるものもありました。これらのパソコンは子供たちにパソコンの分解、組み立てを体験してもらうための教材として利用することになりました。

10月21日10時から16時まで開催された「福井大学きてみてフェア」にて、修理したパソコンの移譲およびパソコンの分解・組み立てイベントを行いました。パソコンの移譲においては希望者があまりにも多かったので、くじ引きを実施し当選した方に移譲することにしました。パソコンの分解・組み立てイベントにも多くの参加者がいらっしゃいました。イベント会場のあちらこちらでパソコンを分解したり組み立てたりしてくださっていて、中には分解用パソコンのパーツを集めて

動作するパソコンを作ってしまう方もいらっしゃいました。当日の参加人数は約200人ほどでした。人手が不足しうまく対応ができず、会場が混乱しましたが、多くの方にパソコンの分解・組み立てを体験していただくことができました。



分解イベントの様子。

また、今年の2月16日に開催された大学連携リーグ学生生活動交流事業プレゼンテーション大会でこの活動について発表しました。発表後に、活動の規模をより広くする方策などの様々なアドバイスをいただきました。これを元にこの活動を広げて、一般市民の方にも不要なパソコンを持ち込んでもらえれば良いなと思っています。

底喰川でゴミを見かけないようにするために

工学部 情報・メディア工学科 4年 永原 拓実

福井大学の近辺を流れる底喰川ではゴミを多く見かけます。そこで、川を流れるゴミを見かけなくするために、川の美化活動を行いました。

川を一通り見て問題だと思ったのは川に道路のゴミが落ちやすいことです。川に隣接している柵やガードレールをすり抜けて、ゴミ袋や空き缶、ペットボトルが落ちやすくなっていて、調べたところ、実際にゴミが落ちていることが分かりました。そこで、今回は、特にガードレールからゴミが落ちやすいゴミ捨て場付近の一ヶ所について、ゴミが落ちないようにガードレールにネットを張ることにしました。まず、福井土木事務所や町内会の方にネットを張ることの許可をいただきました。ガードレールの下50cm程度、幅はゴミ

箱近傍の8m程度にネットを針金でガードレールにくくりつけるように設置しました。設置するものとしてネットを選んだ理由は、安価であること、景観を損なわないこと、水や雪が溜まらないことです。設置した結果、ちゃんとゴミが落ちないように引っ掛かっていて一応の効果を得ることができました。



また他の活動として、川に落ちたゴミが下流に流れないように、川にオイルフェンスを張って実際にゴミをせき止める活動も行いました。それと同時にどのようなゴミが上流から流れてくるかを調査しました。この活動には福井土木事務所、株式会社シンタニコンストラクト、株式会社松田組の方にご協力いただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。川で工事を行っている範囲ならゴミをせき止めるオイルフェンスを設置しても良いという許可をいただき、実際に設置していただきました。積雪時にはフェンス近傍に近づいて作業することが困難になることや川が増水した場合の危険性を考慮し、積雪が酷い場合や川が増水した場合にはオイルフェンスを撤去するという条件の下で、12月4日から約20日程度の期間で川の清掃、ゴミの調査を行いました。可能ならオイルフェンスを、ネットを張った区間を挟むように二ヶ所に張ってどのあたりからゴミが流れてきているかを調べたかったのですが、諸般の事情によりオイルフェンスを張れるのは福井大学文京キャンパス付近の一ヶ所のみとなりました。オイルフェンスより上流からのゴミの量と種類を調べることにしました。

調査の結果、上流から予想以上にゴミが流れてきていることが分かりました。多い日で1日当た



り10kg以上のゴミが流れてきており、平均して1日当たり約4.5kgのゴミが流れてきていることが分かりました。実際に流れてきたゴミは飲み物の容器やスプレー缶、分別されていないゴミが入った袋、おむつが入った袋などでした。

コラム 福井大学附属幼稚園・中学校生徒の作品 vol.5



20 学生の環境活動

福井大学の学生や附属学校園の児童・生徒・園児は日頃から授業などを通して環境活動をおこなっています。今回は、附属幼稚園の環境活動、教育地域科学部地域科学課程環境マネジメント系学生により獣害対策とジビエ普及活動、工学部建築建設工学科学生による東日本大震災による農地の塩害の現地調査について取り上げます。

附属幼稚園の環境活動

福井大学教育地域科学部附属小・中学校、幼稚園ではいろいろな環境活動を実施していますが、今回は附属幼稚園の活動を紹介します。

■廃材の利用

附属幼稚園では教育目標「夢をもち、未来を拓く子の育成」に基づき、一人一人の思いを大切に、幼児の主体的な遊びを通して総合的な保育活動を展開しています。活動のひとつとして廃材を利用した製作活動があります。園児が製作に使用する材料は新規で購入するものではありません。園から出る廃材、例えばトイレトーパーの芯や牛乳パックなどを再利用しています。また園児は家でお菓子の箱やサランラップの芯などの廃材を集めて持ってきてくれます。持ってきたものは各教室の決められた場所に入れてみんなで使用します。また年1回実施される「親子で遊ぼう 保育参加」では、保護者が園児と一緒にさまざまな活動をしますが廃材を利用し親子で製作する姿も見られます。



▲「親子で遊ぼう 保育参加」の様子



▲廃材は仕分けをして棚にいられています

■節水

節水については先生方が都度指導されています。園児達がわかりやすいように「水はえんぴつの太さでだましよう」と説明しています。具体的なものの太さで説明することにより園児達も理解し節水に努めています。

■グリーンカーテン

幼稚園南側に毎年グリーンカーテンを育てています。2013年も琉球あさがおを育てました。ここ数年琉球あさがおを育てていますが、苗は冬越しできるので、前年のものを大事に残しておき、再び立派なグリーンカーテンにしています。園児は毎日水やりをしています。暑さ対策はもとより大切な環境教育の1つとなっています。



▲たくさんの琉球あさがおを育てます

この他にも古紙のリサイクル(裏紙利用等)やエアコンの使用ピークをずらす取り組みをしています。このような取り組みが日頃から自然におこなわれており、教員・園児の環境への意識の高さがうかがえます。

獣害対策とジビエ普及活動

教育地域科学部 地域科学課程 環境マネジメント系 4年 伊藤 優宏

■ジビエ普及活動の狙い

福井県では、イノシシやシカによる獣害被害が深刻な問題となっています。私たち教育地域科学部地域科学課程環境マネジメント系の6名は、地域課題ワークショップの授業を中心に獣害対策に取り組んできました。この活動の集大成として取り組んだのが「ジビエフェアin福井大学」というジビエ(野生鳥獣の狩猟肉)をPRするイベントです。臭みがあるのではないかと、調理法がわからないなどの理由から敬遠されているジビエを、一度味わってもらい、魅力を知ってもらうことが目的です。また、ジビエを好んで食べる人が増えれば、イノシシなどの害獣の捕獲も盛んになります。これまでは肉の需要が少なく、捕獲を控えることもあった害獣を人々が山の恵みとして味わうことで頭数を減らし、獣害の減少につなげたいと考えジビエフェアを開催しました。

■ジビエフェアについて

私たちが行ったジビエフェアでは

- ①イノシシ肉のすきやき丼提供
- ②オリジナルの小冊子作成
- ③ジビエに関するアンケート

を行いました。

すきやき丼提供については私たちの手で試作を行ない、福井大学生協同組合の協力で、ジビエフェア期間中の限定メニューとして販売していただきました。小冊子については、「ジビエの魅力まるわかりガイド」として福井県の獣害被害の現状から、ジビエを使ったレシピの紹介までを1冊にわかりやすくまとめました。

アンケートについては、ジビエに対する学生の感想を知るために配布しました。なかでも「イノシシ肉を食べた感想を教えてください」という問いに、9割の人がイノシシ肉を

好きと答えていました。この結果から、私たちの目的であったジビエの魅力を伝えることに成功したと考えています。



▲イノシシ肉のすきやき丼

■活動のまとめとして

ジビエを食べることは、だれもが楽しみながらできる獣害対策であり、地域貢献にもなります。そんなジビエの魅力を知ってもらうことや、ジビエに対する悪いイメージをなくしてもらうためには、ジビエフェアのように一度食べてもらうことが最も効果的です。今後も試食会や、期間限定のフェアなどで気軽にジビエを口にする機会が増えると良いと思います。最終的にはジビエが店頭に並び、家庭での肉の選択肢としてジビエが普及していくことに期待しています。



除塩工事の効率化

大学院工学研究科 建築建設工学専攻 1年 竹崎 寛之

2011年3月11日に発生した東日本大震災により東北地方は甚大な被害を受けました。中でも“津波による農地の塩害”は深刻なもので、宮城県の被害面積は約1.5万haに達し、その約85%が水田によるものでした。被害農地の復旧作業として除塩工事が現在もお宮城県を中心に行われています。除塩工事は主に溶出法（水田に水を張り数日間かけて土壌中の塩分を溶出させ、塩水を排出する方法）が行われていますが、この方法には多くの時間とコストがかかっています。加えて、現在行われている除塩工事の水深や期間には科学的根拠がないのが現状です。そこで溶出法の効率化を最終目標として、現在の除塩工事を定量評価するために、塩害水田に土壌塩分・水分センサーを埋設し、除塩工事の事前・事後評価を行いました。

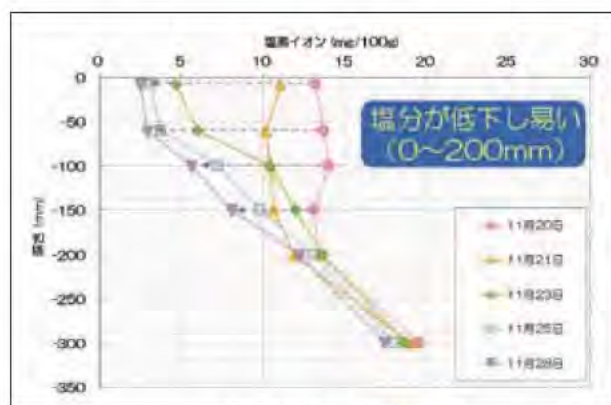
調査は11月20日から28日までの9日間にわたって宮城県名取市にて行いました。調査では各種センサーを埋設し、土壌中の塩分移動を調べるとともに、土壌を採取し、除塩工事前後の塩分量を調べました。



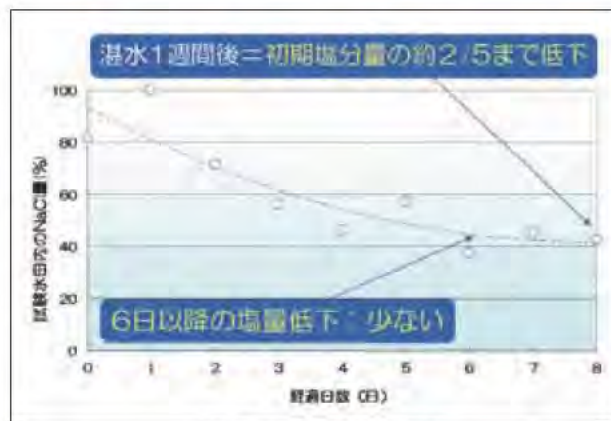
▲ センサー設置の様子

調査の結果、11月21日（湛水直後）から28日（排水直後）までの7日間で、地表から200mmまでの塩分の低下が顕著に確認できました。また、200mm以深では水分が浸透せず、塩移動は微小でした。地表から300mmまでの土壌塩分は湛水後に急

低下し、6日以降の塩分低下率は緩やかになることが分かりました。なお、湛水の一週間後には初期土壌塩量の約2/5まで低下したことが確認できました。



土壌塩分の溶出過程



除塩工事の塩分排出効果

現在も農家、土木工事業者および関係官庁と協力して研究を進めており、今後も早期営農再開のために、尽力していきたいと考えています。

末筆となりましたが、ご協力いただきました東北重機工事株式会社の佐々木一敏氏をはじめ関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。